プロセス・パフォーマンスとアイデンティティとの関連性について

畑野 快
京都大学大学院教育学研究科

問題意識 1980 年代から大学への積極的な関わりが大学生の成長と関わっているという研究がアメリカを中心としてなされている。Astin(1984)は大学への「関わり(involvment)」が学生の成長と密接に関わっているとし、学生の大学への関わりが知識や技能の獲得と関わっていることを指摘している。Astin を受け Kuh は、Astin の「関わり」をエンゲージメント(engagement)と捉えなおし(Kuh, 2001)、大規模調査(National Survey of Student Engagement:NSSE)に基づいて、Astin の理論を実証している(例えば Kuh & Umback, 2004 など)。このようなアメリカでの研究を受けて、山田(2009)は日本においても類似の調査を行い、学生の大学への関わりと知識・技能の獲得が関連していることを示している。しかしこれらの研究は知識・技能の獲得をアウトカムとして提示することに焦点が当てられており、そのことが発達的にどのように意味を持つのかという点を明確に示した研究はこれまでみられない。すなわち成長の指標が知識・技能の獲得に焦点化されることが多かったことから、成長の視点が限定的であったといえる。そこで本研究では成長の観点をより拡張し、アイデンティティを成長の指標とする。なぜなら大学生期は発達心理学的観点からすると青年期後期にあたり、その問題は最大限抽象化するとアイデンティティの問題として捉えることができるからである(仲間, 2006)。また Baxter Magolda(2003)は大学での知識の獲得が卒業後の自己定義を支えるとしており、知識の獲得とアイデンティティとの関連を指摘している。これらを踏まえ、本研究では大学への積極的な関わりとアイデンティティが関連していることを仮説とする。大学への積極的な関わりの指標として本研究では溝上によるプロセス・パフォーマンス(Process Performance:以下 PP)を用いる。PP とは「授業や課題に対しその結果でなく過程に意欲的に取り組むこと」(溝上, 2010)とされており、大学への積極的な関わりの中でも授業への関わりに焦点を当てたものである。仮説の実証にあたり、まず研究 I において PP を測定する尺度(Process performance Scale:以下 PPS)の作成, 信頼性及び妥当性の検討を行う。そして研究 II において PP とアイデンティティとの関連を相関分析によって実証する。この仮説を実証することによって、大学への積極的な関わりが単に知識や技能の獲得だけでなく、自らの成長と関連しているということを示すことが本研究の目的である。

研究 I　目的:PPS の作成、信頼性及び妥当性の検討

1. 調査対象京都府内の大学生 272 名(男性 194 名, 女性 78 名, 平均年齢 19.05 歳, SD=1.148)

2. 調査内容 (1) PPS の作成：溝上（2010）の記述，予備調査の自由記述を参考に筆者が作成した 15 項目群、5 件法。(2) 積極的意志・継続意志：浅野（2002）によって作成された学習に対する積極性，継続性を示す尺度。3 項目，2 項目、4 件法。(3) 時間的展望尺度（希望）：白井（1994, 1997）によって作成された未来に対する時間的展望をどの程度感じているかを測定する尺度。5 項目，5 件法。

3. 調査時期および手続き 2009 年 6 月に，各尺度からなる無記名の個人記入形式の質問紙を大学の講義中に配布し，一斉に実施した。

結果と考察：PPS15 項目群に対し，主成分分析を行った。固有値の減衰状況から 1 因子構

造が確認され，1 因子に対する負荷量が低い項目を削除し，上位 9 項目を採用した（Table1）。累積寄与率は 52,68%であり，Cronbach の α 係数は.88 であった。この結果から本尺度の内的整合性の観点からの信頼性は十分であったといえる。平均値は 28.79（SD＝6.97）であった。

Table1プロセス・パフォーマンス尺度主成分分析結果

	項目	成分
プ5	＊レポートや課題はただ提出すればいいという気分で仕上げることが多い。	.81
プ13	レポートは満足がいくように仕上げる。	.78
プ4	課されたレポートや課題を少しでも良いものに仕上げようと努力する。	.78
プ12	＊課題には最小限の努力しかおこなわない。	.75
プ14	＊単位さえもらえればよいという気持ちで授業に出る。	.75
プ7	課題は納得いくまで取り組む。	.74
プ8	授業には意欲的に取り組む。	.73
プ2	＊授業はただぼうっと聞いている。	.64
プ11	プレゼンテーションの際、何を質問されても大丈夫なように十分に調べる。	.51

次に PPS の妥当性を検討するため、PPS と学習への積極的意志・継続意志、時間的展望との相関分析を行った（Table2)。それぞれ中程度の正の相関がみられたため、部分的に妥当性が確認されたといえる。

Table2.プロセス・パフォーマンスと積極的関与、継続的意志、時間的展望との相関係数

	積極的関与	継続的意志	時間的展望
プロセス・パフォーマンス	.55 ***	.48 ***	.41 ***

***p＜.001

研究Ⅱ　目的：PPS とアイデンティティとの関連性の実証

1. 調査対象　京都府、滋賀県内の大学生 324 名（男性 192 名，女性 134 名，平均年齢 20.10 歳，SD=1.50）

2. 調査内容（1）PPS：研究Ⅰによって作成された PP を測定する尺度。 5 件法。（2）アイデンティティ尺度：谷（2001）によって作成されたアイデンティティの感覚を測定する尺度。4 下位尺度のうち本研究の目的に沿う 2 下位尺度（「対自的同一性：自らの未来への確信を測定」、「心理社会的同一性：社会への適応感を測定」）を用いた。それぞれ 5 項目、7 件法。

3. 調査時期および手続き 2009 年 12 月，2010 年 1 月に，各尺度からなる無記名の個人記入形式の質問紙を大学の講義中に配布し，一斉に実施した。

結果と考察：PP とアイデンティティとの関連を実証するため、PPS とアイデンティティ尺度との間で相関分析を行った。結果を Table3 に示す。

Table3.プロセス・パフォーマンスとアイデンティティ（対自、社会、対自＋社会）との相関分析結

	対自	心理社会	アイデンティティ
プロセス・パフォーマンス	.23 ***	.31 ***	.28 ***

***p＜.001

相関分析の結果から PP とアイデンティティとの間には，正の関連性がみられた。この結果から大学、特に授業への積極的な関わりが自らの自己定義の問題であるアイデンティティと関わっている可能性が示唆された。また相関係数の差異から PP が社会への適応感とより関連している可能性が示唆された。